

亜人の狐族と最強の魔法使い！

ドンドン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

うーん、こういうの作ったこと無いからよくわからないんですけど…下手くそですが、読んでいって下さい。。

もし、良いな、とか面白いな、とか思ったらお気に入り登録、評価のほど、お願いします。

## 目次

出会い	1
仕事	10
救出作戦！	20
いざ！月の家族を助け出せ！	27
月の家族とのバトル！の後はハンターの集団!?	34

## 出会い

…「はあ、はあ、はあっ…ここまで…来れば…はあ…。」

私は今現在逃がっている。殺す気で追ってくる人間、売り飛ばそうと  
してくる人間から。

ハンターA「どこだー！」

ハンターB「そっちに行つたぞ！」

ハンターC「この森からは出てないはずだ！全体的に探せ！」

…「うっ…まずい…もう来た…でも…もう、体力が…はあ、はあ  
…」

もう2時間も似たような感じ。ずっと逃げて回ってる。

ハンターC「くそ！どこ行きやがった！亜人の分際でちよこまかと  
…！おい！そっちも探せ！」

ハンター達「はっ！」

…「……………逃げなきゃ……………」

私は揺れるように走り出した。

足がふらふらする…。でも…逃げなきゃ…逃げなきゃいけない。  
捕まったら殺されるのがオチだから…それはもう分かってる…………。

もう限界なんてとつくに超えてる。私の狐の耳としっぽも毛が汚  
れてたり血が出てたりしてるし。

私は…亜人、狐族。周りの人間からは忌み嫌われる存在。だから  
逃がてる。

…「家だ…空き家っぽいし…隠させてもらおう…………。」

見るからに結構ボロボロの家を見つけた。ちょうど良い。身を隠させてもらうことにした。

キーー…

意外と家具とかは普通に残ってるし、綺麗な感じ。

：「電気は…ついてるわけ無いから、蝋燭とかあったら良いな…。」  
「そうやって部屋を探そうとした時だった。」

パチッ！

電気がついた。

それと同時に終わった、とも感じた。人が住んでいたんだ。ああ、これで私の人生も終わりか…：階段から男の人の姿が見えた。

??? 「あーよく寝た…：はあ!？」

うん、知ってた。そうなるよね…ああもうどうでもしてください。  
どうせここで終わるか研究所にでも連れていかれるんですから。

2

??? 「え？ちよ、ちよつと待ってくれ！え？何で入ってきてんの？そして誰？いや、それより怪我の治癒が先か。ちよ、ちよつとじつとしててくれ。」

魔方陣…いや、それ、回復の魔方陣じゃん！え？何で？何でこの人は私を見ても殺そうとしたりとかしないの？あ、回復させてから研究所に売るとかそういう感じかな？

??? 「ふう、これでオツケー、と。…で、とりあえずだけど、誰？」

あれ、この人は殺そうとしたりとかしない感じの人なの？でも何で？

??? 「あれ、もしかして喋れない感じ？もしくは耳が聞こえないとか？」

…「いや、喋れるし、聞こえます。ただ、ちよつとびつくりしちやつて…。」

うーん…果たしてそんな人が存在するのか…亜人って人を襲って殺すって認識されてるらしいから…ほんとはそんなこと無いのに。でも、何で殺しもしないし逃げもしないんだろう…。それに…

??? 「おーい？」

…「ひゃあっ!?!」

??? 「あ、ごめん。脅かすつもりじゃなかったんだけど、全然返事がないから…。」

あ、完全に自分の世界に入ってた。

…「あ…ごめんなさい。」

総 「いや、別に謝らなくても…。まあいいや。俺はここに住んでる薬屋兼魔法使い、光崎 総（こうさき そう）。君は？」

…「名前…：…私の…：名前…。」

名前：どうしよう。あることはあるけど、今会ったばかりの人、それも人間に言っただけなのかな…。でも、何かこの人は信じて良いような気がする。でもどうしよう…：うーん…良いかな。うん。私の勘を信じる！

月 「私の…名前…：月（つき）。名字は…無い。」  
言っちゃった。でもこれで良いと思う。多分。

総 「分かった。えーとじゃあ、月ちゃんは、何でここに？」  
え？分からないの？こんな状態だったら分かるでしょ。

亜人なんかずっと追いかけて回されてる様なものなんだから。

月「えーと…総さんは、私を見て何か思わないの？」

総「何かって？」

月「へえ？」

あ、何か変な声出ちゃった。え？この人は亜人のこと、知らないの？いや、そんなわけ無いよね、え？

月「えーと、亜人って知ってるよね？」

総「あ、ああ。あんまりその言い方はしたくないんだが。」

月「私とその亜人で、狐族なの！」

言った後で後悔した。もし気づかれたらそのまま殺されるということを考えてなかった。どうしよう…

総「おう、で？」

月「え？」

総「いや、え？じゃなくて、何でここに？っていう話だったでしょ？」

この人はバカなの？いや、助けてもらってこの言い方はよくないんだろうけど、正直バカ何じゃないかと思いはじめてる。

月「えーと…それで、街の人たちに見つかっちゃって、追いかけて、ここを見つけたの。誰もすんでいなさそうだったから…身を隠させてもらおうと思って…。」

総「そうか。なるほどな。なら少しここで休んでいけ。俺は今から

店開けるから。」

再びえ？だ。

月「殺さないの？」

総「んあ？何で殺さなきゃいけない。」

ああ、やっぱりバカだった。ええー…殺して町役場に持っていか、研究所に連れていっただけで一生遊んで暮らせる位のお金ももらえりし、人を襲って殺すって言われてる奴を家に泊めるってどんな頭してるんだろう…。

総「俺は殺す必要の無い奴は殺したくないんだ。金のために仮にも大方同じ奴を殺すような奴の気が知れない。それに、お前は亜人が人を襲って殺すっていう噂に流されて気が引けてんだろ？実際は違うんだろうが。」

月「え？」

全くバカじゃなかった。そう。亜人が人を襲う何て言うのはデマにすぎなかった。でもいつの間にかそんなことに縛られていた気がする。

総「下手に気を使う必要なんてねえよ。それに、襲ってきたとしても、一人の亜人位なら俺でも対処はできる。殺すわけじゃねえけどな。」

…凄い。まるでこの人も亜人の仲間みたいなしやべり方。相手のことを見透かしてるような、でも何となく安心できる、そんな。この人になら、少し位、気を許しても良いかもしれない。

――――

総「あーよく寝た…はあ!？」

いや、ちよつと待て。起きて早々の頭で理解できる状況じゃない。



は？なに、泥棒？いや、普通に起きて薬屋開けようと思っつて下に降りてきたら狐耳の女の子がいたんですけど!?

総「え？ちよ、ちよつと待ってくれ！え？何で入ってきてんの？そして誰？いや、それより怪我の治癒が先か。ちよ、ちよつとじつとしててくれ。」

よく見たらいろんなところ怪我してんな。ヒール使うか。薬でちまちまやるより今は魔法使った方が早い。

総「ふう、これでオツケー、と。：で、とりあえずだけど、誰？」  
うん、ほんとに誰。全く見知っても無いし、聞いたこともない。いや、一般的には亜人って呼ばれるんだろうが、あんまりそう呼びたくないからなあ。：というか何も話さないな、この子。緊張かな？いや、もしかしたら…

総「あれ、もしかして喋れない感じ？もしくは耳が聞こえないとか？」

月「いや、喋れるし、聞こえます。ただ、ちよつとびつくりしちゃつて…。」

びつくり？何に対してだろうか。こんな家に人が住んでるからか？悪かったな。

総「それで、君、誰？」

：あれ。返事がない。ずっと下向してるし：何か俺した？

総「おーい。」

やつぱり返事がない。どうした。

総「おーい？」

月「ひゃあっ!!」  
おわっ、焦った。

総「あ、ごめん。脅かすつもりじゃなかったんだけど、全然返事がないから…。」

自分の世界にでも入ってたかな？俺もたまにある。それに人の家に入ったんだしな。

月「あ…ごめんなさい。」

総「いや、別に謝らなくても…。まあいいや。俺はここに住んでる薬屋兼魔法使い、光崎 総（こうさき そう）。君は？」

月「名前…私の…名前…。」  
どうした。まあ今あったばかりの奴に名前教えろってのも変な話だが。

月「私の…名前…月。名字は…無い。」  
月、か。名字が無いってことは半人（俺の亜人の呼び方）か。まあ普通の人に狐耳としっぽは付かんわな。

総「分かった。えーとじゃあ、月ちゃんは、何でここに？」

月「えーと…総さんは、私を見て何か思わないの？」  
うーん…強いて言うなら超可愛い…（今ロリコンだった奴は出てこい。今なら冥界送りで済ませてやる。）

総「何かあって？」

月「へえ？」

どうした。何か変な声出たぞ。ああ、もしかして自分が周りと違う

ことを気にしてるんだろうか。

月「えーと、亜人って知ってるよね？」

そりや知ってる。お前のことだろ。だが、やっぱりその言葉聞くのも抵抗がある…

総「あ、ああ。あんまりその言い方はしたくないんだが。」

月「私とその亜人で、狐族なの！」

うん、知ってた。いや、見たらわかるでしょ。そして何でちよつとむきになってんの。

総「おう、で？」

月「え？」

総「いや、え？じゃなくて、何でここに？っていう話だっただろ？」  
ほんとにどうした。人の心なんか読めないよなあ。やっぱり緊張かな？

月「えーと…それで、街の人たちに見つかっちゃって、追いかけて、ここを見つけたの。誰もすんでいなさそうだったから…身を隠させてもらおうと思って…。」

そうか、ボロボロで悪かったな。なんて言わねえぞ。流石に俺でも常識ぐらいある。

総「そうか。なるほどな。なら少しここで休んでいけ。俺は今から店開けるから。」

そろそろ準備しないと。だからといって外に放りだす訳にいかないしな。

月「殺さないの？」

総「んあ？何で殺さなきゃいけない。」

何か俺も変な声出たぞ。まあいいや。多分気を使ってるんだろう。

総「俺は殺す必要の無い奴は殺したくないんだ。金のために仮にも大方同じ人を殺すような奴の気が知れない。それに、お前は亜人が人を襲って殺すっていう噂に流されて気が引けてんだろ？実際は違うんだろうが。」

月「え？」

あれ、外れた？まあ憶測にすぎなかったからな。まあ一回続けるか。

総「下手に気を使う必要なんてねえよ。それに、襲ってきたとしても、一人の亜人位なら俺でも対処はできる。殺すわけじゃねえけどな。」

こう見えてもランク的には世界最高のランク10だ。無力化させることぐらい造作もない。さて、どうやらこれから忙しくなりそうだな。

## 仕事

月「あれ…ここは？」

気が付いたら何も無い真っ白な所にいた。

月「私は…確か、総さんの所にいて…」

なんだか頭がぼんやりする。次第に上も下も自分が座っているのか立っているのかさえ分からなくなってきた。でも、苦しくはない。水の中に浮いているような感覚に近い。

月「何だろう…ここ…」

??? 「気づいたか。」

誰もいないのに、声が聞こえる。

月「誰…？」

??? 「うーむ、名乗るような名前なんてないな。まあ、Yとするか。」

月「ここは…どこ？」

Y「意識の中、とでも言うっておくか。簡単に言うところんな感じの夢、と思ってもらって構わない。」

夢？ どういうこと？

Y「ちつ、時間か。まあ、会うことはまたあるだろう。じゃあな。」

月「あつ！ちよつと！もう少し話を…」

そこまで言ったが、右目と左目の見えている景色は既に違っていた。

月「何だったんだろう…あれ。」

気が付くと知らない天井があった。

そうだ。私、総さんの家に泊まらせてもらってたんだった。

でも…総さんの姿は見えないな…あ、仕事かな？

総「…はい、……………ですネ……………じゃあ……………後に……………さい」

月「？何の話だろう…あ、薬屋さんをやってるって言ってたよね。行ってみよう。」

声のする方へと行ってみることにした。

月「…ひにやえあ!？」

総「うおあ!？」

…曲がり角で総さんとぶつかった。まだ私は体が小さいから後ろにこけちやつた。

総「おう、起きてたか。まあとりあえず大丈夫か？」

手を貸してくれた。つくづく思うけど、優しいなあ。

月「だ、大丈夫!ごめんなさい。」

総「で、何しに来た？」

何しに…あんまり目的なかつたなあ…。

月「あ、な、何かお手伝いでも出来たらな、と思って、それで。」

総さんがふつと頬を緩めた。

総「ありがとな。嬉しいんだけど、多分分からないと思うから。あ、部屋、いろいろあると思うから適当にいて。もうじきこっちも終わると思うから。」

月「はい。」

邪魔だっただろうか。

私は部屋にもどってぐるりと部屋を見回してみると本棚があった。ほとんど小説だったが、むしろそっちの方が良い。人間からすると、小学一年生位の体だが、年齢はもう300歳位だもんね。時計を見ると、もう4時だ。

コンコン、

月「はい。」

総「入るぞ。」

キー、パタン

総「ああ、本読んでたのか。」

月「あ、総さん。なんででしょう?」

ん?何か総さんの何かが違う?様な気がする。何か…怪訝そうにこつち見てる。え?何か私変なこと言った?

月「?…どうかしました?」

総「月ちゃん、今何歳?」

え?何の話、急に。

月「えーと…」

総「ああ、半人状態の実年齢。」

?何を知りたいんだろうか。

月「えーと…大体300歳位ですかね。」

あ！そうだ。いきなりこんなこと言ったら変な子だと思われちゃう！どうしよう！

総「なるほど。それでか。」  
？

月「えーと…何が？」

総「いや、小一がこのしゃべり方で小説読むってなかなか違和感だったから。」

月「あ、なるほど。そういうことでしたか。こう見えてもしつかり300年強生きてますので。ところで、総さんのお仕事って…」

総「ああ、薬屋だ。」

何となく会話を続けなきゃいけない気がするから質問する。

月「楽しいですか？」

総「？ああ、楽しいぞ。何より人の役に立てるのが楽しいし嬉しい。」

月「……立派ですね……あ……！」

総「？どうした？」

そうだ…いや…でもな……

総「どうした？何かあったか？」

私は思わず泣いていた。すっかり忘れてしまっていたのだ、お父さんとお母さん、弟のことを。



月「すみません…聞いてくれますか…？」

総「あ、ああ。」

私の家族は、一昨日人間に囚われてしまった。お父さんが、私と弟を転移魔法でこの辺に連れていってくれたが、弟もまた捕まってしまった。今からでも助けに行きたいが、総さんに迷惑がかかってしまう。そういうことを話した。総さんは目を閉じてゆっくり聞いてくれた。

そして、

総「月ちゃんはどうしたい？」

月「私は…皆を助きたい！」

それは心からの願いだった。もし総さんが拒否しても、私は一人でも行くつもりだった。いや、いくら優しい総さんでも拒否するだろう。巫人に手を貸すことはもう人としても見られなくなることになるのだ。

総「そうか。残念だが、俺は行けないな。」

…やっぱりか。いや、そうだろうなと思っていたけど、やっぱりそうなるよね。

月「…分かりました。じゃあ、私だけでも…」

総「なんて言うと思ったか？」

月「……え？」

え？ どういう…

総「俺も行ってやるよ。それに、お前一人で行って何ができる。手を貸してやるよ。」

え……私、ほんつとにこの人は根っからのいい人な

んだな、と感じた。

月「ありがとうございます…ごじます…!」

総「なあに。礼をするには早えだろ。助け出せての初めて成功だからな。」

総「ああ、はい。頭痛薬ですね、いつものね。大変ですね、偏頭痛。じゃあ薬が切れたらまた来てください。」

只今仕事中。まあ、仕事兼遊びみたいなものか。好きで薬屋やってくるんだしな。さて、列が終わったな。薬、補充しとくか。

月「…ひにやえあ!」

総「うおあ!」

…曲がり角で月ちゃんとぶつかかった。月ちゃんは体が小さいから後ろにこけちまった。ごめ。

総「おう、起きてたか。まあとりあえず大丈夫か?」  
目が覚めてたみたいだ。怪我也問題ないっぽい。良かった。

月「だ、大丈夫!ごめんなさい。」

総「で、何しに来た?」

あ、何かぶつきらぼうな言い方みたいになっちゃった。

月「あ、な、何かお手伝いでも出来たらな、と思って、それで。」  
手伝いか…ほんとに優しい子なんだな…そう思ってたらふつと頬が緩んだ。

総「ありがとな。嬉しいんだけど、多分分からないと思うから。あ、部屋、いろいろあると思うから適当にいて。もうじきこっちも終わると思うから。」

流石に薬学はわからないだろう…というかあの子、何歳なんだろうか。

月「はい。」

全く、見ているだけで和むな。もう一度言うが、ロリコンではない。仕事終わり

月ちゃんの部屋のドアをノックする。

コンコン、

月「はい。」

総「入るぞ。」

キー、パタン

総「ああ、本読んでたのか。」

見るからに小一の子が読むような物じゃない物読んでんだけど。

月「あ、総さん。なんででしょう？」

何でしょうって…ほんとに何歳だよ。

月「?…どうかしました？」

総「月ちゃん、今何歳？」

あ、何か唐突に聞いたけど、まあ良いか。うーん…2、30歳位かなあ。

月「えーと…」

総「ああ、半人状態の実年齢。」  
見た目じゃなくてな。

月「えーと…大体300歳位ですかね。」  
ええ…想像の斜め上行ったわ。300で…。  
そのお陰で一瞬反応が遅れた。

総「なるほど。それでか。」  
うん。順序も説明もくそもない単発の反応。

月「えーと…何が？」  
うん、そりやそうなるよね。それが普通だ。

総「いや、小一がこのしゃべり方で小説読むってなかなか違和感  
だったから。」

月「あ、なるほど。そういうことでしたか。こう見えてもしっかり  
300年強生きてますので。ところで、総さんのお仕事って…」

総「ああ、薬屋だ。」  
あれ、言っただけじゃなかったっけか？

月「楽しいですか？」

総「？ああ、楽しいぞ。何より人の役に立てるのが楽しいし嬉し  
い。」

まあ、もつと大事なのは自分がその仕事をやりたいと思えているか  
だが。俺？もちろんそう思っている。

月「……立派ですね……あ……！」

総「?どうした?」

急に月ちゃんが泣き出した。え、何?何!?何か俺した?

総「どうした?何かあったか?」

とりあえず……えーと、次どうしよう……

月「すみません……聞いてくれますか……?」

総「あ、ああ。」

どうやら彼女の家族は、一昨日人間に囚われてしまったらしい。お父さんが、月ちゃんと弟を転移魔法でこの辺に連れていってくれたが、弟もまた捕まってしまった。今からでも助けに行きたいが、俺に迷惑がかかってしまうんじゃないか、っていうことだった。なるほどねえ。

総「月ちゃんはどうしたい?」

まずは本人の意見の尊重。

月「私は……皆を助きたい!」

それが彼女の心からの願いだったことはよく分かった。俺は決めた。

総「そうか。残念だが、俺は行けないな。」

一回下げたおいてから上げたら良いだろ?

月「……分かりました。じゃあ、私だけでも……」

総「なんて言うと思ったか?」

月「……………え？」

ふふ、

総「俺も行ってやるよ。それに、お前一人で行って何ができる。手を貸してやるよ。」

ある程度なら狐族の知識ぐらいはある。手助け出来るように頑張らねば。

月「ありがとうございます…！」

総「なあに。礼をするには早えだろ。助け出せての初めて成功だからな。」

救出作戦！

昨日、総さんは私の家族を助ける手伝いをしてくれるって言ってくれた。でも、どうやるんだろうか…

月「どうやって皆を助けるんですか？」

総「うーん…詳しいことはまだハッキリとは分からないんだけど…まずは月ちゃんのご家族がどこにいるのかを探すのが先決だな。」

月「それはどうやって…」

総「大抵半人って、殺されるか研究所行きっていうのは知ってるよね？」

それはもちろん知っている。だからうなずいた。  
すると総さんも少しうなずいて話を進めた。

総「でも、特に狐族とかの珍しい半人はそもそも見つけるのが難しいから、ほとんど研究所とかに連れていかれるんだ。今のところ、狐族がそのまま殺された様なケースはないし、月ちゃんは連れていかれたって言ったろ？つまり、…ちよつとこの言い方は気が引けるけど、どこかでサンプルにされている可能性が高い。だから、片っ端から電話をかける。」

えええ…嘘でしょ。そういう研究所ってこの国だけでも2、300はあるよ？これは大変な仕事だ。

総「ただし！ここでは月ちゃんは手伝う必要はない。」

…え？

月「な、何で？二人でやった方が早く終わるし、総さんの負担も少なくてすむでしょ？」

何で：気を使ってるのかな：

総「いや、電話をして、譲ってもらえてとしても、声の主が違うだろう。こういう場合って電話をした張本人しか受け取りが出来ないんだ。だったら、もし月ちゃんに電話をした所にいたとしても、月ちゃんしか迎えに行けない。そうだったら、即効で捕まるのがオチだ。まあ、例外もあるけど。」

でも：

月「で、でも！じゃあ、私は何をしたら良いの？」

総「今回の救出っていう所では月ちゃんが出る必要はない。」

月「えっ：：何で：：」

その声を遮るように総さんは続けた。

総「その代わり、月ちゃんにはちよつと辛いかもしれない仕事を頼むことになる。狐族は、幻術や呪術等を得意とする。だから、救出出来たとき、恐らくご家族は、麻薬や他の薬とかで状態異常や記憶障害を起こして抵抗できないようにされているはずだ。その時の話し相手になってもらいたい。」

月「：：」

状態異常：：記憶：：障害：：：：お父さんやお母さんが：：？：：この暗い気持ちを感じ取ってくれたのか、総さんは続けた。

総「まあ、これは可能性の一つだ。これより悪い可能性もあるし、良い可能性もある。まずは探すのが先決だ。」

：：：うなずくしかなかった。でも、これでもしかしたら見つかるかも知れない。そう思うと少し気が楽になった。



そこから、総さんはずっと電話をしていた。仕事でも合間を縫って探してくれた。こんな時に役に立てない自分に少しイライラしていた。

——二日後——

総「本当ですか!？」

いきなり総さんが声をあげた。もちろん電話中だ。もしかして…

総「はい、…はい、…三人…大体どれぐらい…はい、四日前ぐらい…はい。ではそのうちおうかがいしてもよろしいでしょうか。…はい!ありがとうございます。」

ガチャツ

総「月ちゃん!もしかしたら見つかったかもしれない!」

え…嘘…

信じられない、という気分で聞く。

月「ほんとに…?」

総「ああ、四日前ぐらいに三人、運ばれてきたそうさ。」

月「四日前っていつたら…」

嘘…

月「皆が捕まっちゃった日…」

これは……またみんなに会えるのかな……みんなと…また…

総「ただ…相手から話を聞いたんだが、想像よりかなりの量の薬を使って錯乱状態にしているらしい。抵抗力がかなり強かったらしくてな…」

月「そんな…じゃあ…」

総「大丈夫。どんなに錯乱状態になっても治してやるさ。ここがどこか忘れたのか？こう見えても薬屋だぞ？」

総さんがしししつ、と笑う。安心させようとしてくれてるんだろうな。

総「明日。午前8時に向こうへ行く。そこで交渉をして譲ってもらおう。」

明日…か。

眠い。昨日から徹夜で狐族のこととか研究所での半人の生活とかを調べてたからな。

月「どうやって皆を助けるんですか？」

総「うーん…詳しいことはまだハッキリとは分からないんだけど…まずは月ちゃんのご家族がどこにいるのかを探るのが先決だな。」

月「それはどうやって…」

総「大抵半人って、捕まったら殺されるか研究所行きっていうのは知ってるよね？」

うなずいてくれたから軽くうなずき返す。

総「でも、特に狐族とかの珍しい半人はそもそも見つけるのが難しいから、ほとんど研究所とかに連れていかれるんだ。今のところ、狐族がそのまま殺された様なケースはないし、月ちゃんは連れていかれたって言ったる？つまり、…ちよつとこの言い方は気が引けるけど、どこかでサンプルにされている可能性が高い。だから、片っ端から電

話をかける。」

：とは言ったもののこの国での研究所だけでも昨日調べたら267箇所あった。何でそんなにあるんよ。

総「ただし、ここでは月ちゃんは手伝う必要はない。」

ああ、体力と気力は残しておいてもらわないと。

月「な、何で？二人でやった方が早く終わるし、総さんの負担も少なくてすむでしょ？」

やっぱり「我より人」か。

総「いや、電話をして、譲ってもらえてとしても、声の主が違うだろ。こういう場合って電話をした張本人しか受け取りが出来ないんだ。だったら、もし月ちゃんが電話をした所にいたとしても、月ちゃんしか迎えに行けない。そうなったら、即効で捕まるのがオチだ。まあ、例外もあるけど。」

例外っていうのは、たまに半人にもちゃんとした対応をする所もあるらしいが…まあ世界で探しても20あれば良い方だな、悲しいことに。

月「で、でも！じゃあ、私は何をしたら良いの？」

総「今回の救出っていう所では月ちゃんが出る必要はない。」

月「えっ…何で…」

そう。ここが月ちゃんが一番の仕事であり、一番重要な所だ。

総「その代わりに、月ちゃんにはちよつと辛いかもしれない仕事を頼むことになる。狐族は、幻術や呪術等を得意とする。だから、救出に来たとき、恐らくご家族は、麻薬や他の薬とかで状態異常や記憶障害を起こして抵抗できないようにされているはずだ。その時の話し相

手になつてもらいたい。」

月「…」

そう。ここが一番重要で、一番辛い所だ。特に身内となると尚更だな。だが、ここが月ちゃんじゃないといけないのもまた事実だ。

…うん、暗い気持ちにもなるよな、そりゃ。少しの可能性としては…

総「まあ、これは可能性の一つだ。これより悪い可能性もあるし、良い可能性もある。まずは探るのが先決だ。」

うなずいてくれた。いや、うなずくしかなかったんだろう。これは…残酷な運命に会うことにもなるかもしれない。

そこから俺はずっと電話をした。仕事中でもお客さんがいないことを見てから合間にも電話をしていた。そしてついに…

——二日後——

総「本当ですか!？」

相手「はい。三匹、うちにこの間運ばれてきましたよ。」

総「えーと、大体どれぐらいに…」

相手「えーと…四日ほど前ですな。」

総「はい、四日前ぐらい…はい!では、そのうちおうかがいしてもよろしいでしょうか。」

相手「ああ、構いませんよ、いつでも。」

総「はい!ありがとうございます。」

ガチャッ

総「月ちゃん！もしかしたら見つかったかもしれない！  
というかもうほぼ確定。」

月「ほんとに…？」

総「ああ、四日前ぐらいに三人、運ばれてきたそうさ。」

月「四日前っていつたら…」

ああ、そうさ。

月「皆が捕まっちゃった日…」

だが、これは話すべきなんだろうか…いや、話さないといけないな。

総「ただ…相手から話を聞いたんだが、想像よりかなりの量の薬を  
使って錯乱状態にしているらしい。抵抗力がかなり強かったらしく  
てな…」

月「そんな…じゃあ…」

総「大丈夫。どんなに錯乱状態になっても治してやるさ。ここが  
どこか忘れたのか？こう見えても薬屋だぞ？」

プラスしてランク最高の10の魔法使いとのハッピーセットだ。  
問題ない、と言いたいのが何があるか分からないからな…。

総「明日。午前8時に向こうへ行く。そこで交渉をして譲ってもら  
う。」

いよいよ明日…だな。

いざ！月の家族を助け出せ！

月「……あ、また……ここか。」

またYっていう人が言ってた意識の中？っていうところにいる……。

Y「よう。二日ぶりだな。」

月「あ、Yさん。」

前は全く姿形も見えなかったが、今回はぼんやりした輪郭みたいなのは見えるようになっていた。

月「Yさんって……何者ですか？……ここって私の意識の中なんですよね。なのに、何で他の人が……？」

この間からちよくちよく考えていたが分からなかった。

Y「うーん……何者……か。私にも分からない。自分が何者かも、名前も、容姿ももう覚えていない。」

月「え？それってどういう……？」

Y「おっと、そろそろだな。じゃあ、最後に。今日、気を付けろよ。家族の無事を祈っておくよ。それと、次は……」

Y「もう少し落ち着いた感じで話がしたいな。」

月「え……」

目の前が真っ白の光に包まれる。

そして昨日と同じ天井だ。

月「何なんだろうな……」

そう思いながら着替えて一回に降りて総さんと朝ご飯を食べる。

今日は……今までの人生で一番と言って良いほど緊張している気がする。

総「さて、と。今日だな、そろそろ行ってくるよ。その紙に書いてあるもの、薬棚から出しておいでくれ。」

紙に書いてあるものは、薬なんだろうけど……名前だけじゃ全く分からない。棚のどこにあるかまで書いてくれてて良かった。でも……こんな量のやつ、どうするんだろう……。

ガチャ

総「ただいま…」

月「あ、おかえ「待った」 r え?」

総さんが誰かを連れてきているのは見えたけど、詳しくは見えないまま、何かが起こった。

総「ミラーロケーション」

目の前の空間が割れたような、折り紙をくしゃくしゃにしたみたいなき感じになった。

総「一回そこにいてくれ。薬は、こっちで取りに行く。」

：何かあったんだろうか。何となく想像できる気もするが、したくない気もする。

少しすると、あのよく分からないやつの中から総さんが出てきた。

総「おう。」

月「あ、あの、皆は…」

総「ああ、研究所にいたのはご家族で間違いない。前に月ちゃんに聞いた特徴とほぼ一致してた。」

月「ほぼ…?」

総「ああ、何しろ、錯乱状態が強すぎる。さすがにあの状態でここに居らすわけにいかなかったから、別空間に居てもらうことにした。それに、月ちゃんには衝撃が強すぎる可能性があったからな。」

月「：元に…：戻りますか…：?」

総「ふつ。どうやらなかなか信用されてないらしいな。まあ、会って2、3日だからそうもなるわな。」

いや、そうじゃ無いんだけど、

総「戻る、戻らないじゃなくて、戻すんだよ。やろうと思えば人間何でもできる。絶対戻してやるよ。」

心強いな…：やっぱり総さんは私なんかよりずっと強くて優しい。

月「よろしく…：お願いします…：!」

総「任しとけ!」

その治療が始まって4日位たったとき、私の仕事も始まった。

月「あの…：どんな話をすれば…：」

総「どんな話、か。どんなのでも良い。日常生活のこととか、最近こんなことが嬉しかった、とか。とりあえず何でも良い。返事が返ってこなくても話しかけてやってくれ。」

そしてあのよく分からないやつの中に入った。けど、入れてないのか、全く同じ景色だったから何回か繰り返してたら、総さんがきた。

総「……なにやってんだ？」

月「いや、入れないんですけど……ここ通り抜けても同じだし……」

総「ああ、説明してなかったな。この中、この世界と全く同じだから景色は同じだ。違いと言えば、その中に生き物が居ないってことぐらいだな。」

なるほど……恥ずかしい……

改めて入って同じような所を歩いて居間に行く。すると、三人が目に入った。

月「はっ……」

紛れもなくお父さんとお母さんと弟だった。が、二人は目は空を見てるし、なんと言うか、この世の中の全てに無関心な感じに見えた。

弟は床に突っ伏して寝ていた。まだ不幸中の幸いなのだろうか。

そこから私はずっと話しかけていた。ほとんど聞いていないようだったが、総さんいわく、聞こえてはいるが反応できない、らしい。すると、それから3日すると、変化があった。

月「それでね、……その時、総さんが……え……」

お父さんが泣いていた。同じようなどこを見ているか分からない目をして涙を少し、流していた。

総「ふう……やっとか。」

ふと後ろから総さんの声がしたから振り返ったらやっぱり総さんがいた。

月「やっとか……?」

やっとなってどういう意味だろうか?

聞くと、総さんはふっと笑って

総「感情が戻ってきてる。おそらくあと3、4日もすれば元に戻るだろう。」



月「ほんと!？」

総「ああ。」

良かった…ほんとに…

月が二階から下りてきた。とりあえず朝食を食べる。

今日は…今までの人生で一番と言って良いほど緊張している気がするな。

総「さて、と。今日だな、そろそろ行つてくるよ。その紙に書いてあるもの、薬棚から出しておいてくれ。」

紙に書いてあるものは、解毒薬になるのだが、名前を言われても絶対分からないだろうから場所も書いておいた。

ある研究所

総「どうも、昨日電話させて頂きました、光崎 総です。」

研究員「お待ちしております。こちらです。」

~~~~~

研究員「えーと…1146、1146…すみません、新人なもので…それにしても、光崎さんは何の研究で？」

あー…この質問は想定外だ…すっかり忘れていた。

総「ああ、簡単に言うとなんか体内器官と魔法系統の研究ですかね。幻術とか魔術系統の得意な種族らしいですし、人間とまた違う構造をしているんじゃない、と思ひまして。」

なんだよ、そりゃ。自分で言つといてこれはひどい。

研究員「なるほど…まあ、まだほとんど分かりませんが…」

新人で助かった。これがベテランとかだったらヤバかったな。

研究員「あ、ここですね。薬で錯乱状態にしていますので大丈夫ですよ。」

………これは…ひどいな…。薬の影響で自我なんかとつくに吹き飛んでるような顔をしてる。だが、赤い髪、白しっぽの女の狐族、青い髪、黄色しっぽの男の狐族、緑の髪、緑で先が白しっぽの一回り小さい狐族…間違いないな。

総「いくらで譲ってもらえるんですか？」

「ここが正念場、と言ったところか…そんなに高いと俺でも払えない。」

研究員「その事なんですが、今回は三匹で三十万円だそうです。」

「……………は？いや、安くはないか？」

研究員「そうですね。安すぎると思ったんですけど、主任がもう使わないから安くやると言っております。あ、ただ、その…」

ん？なんだ？と言うかもう使わないから、か…ひどい言われようだな。

研究員「あの、主任がぜひお会いしたいと申しているのですが…会っていただけませんか？」

ん？そんなことか。

総「ああ、良いですけど。」

ぱつと顔が明るくなったな。何があった。

研究員「ありがとうございます！実のところ、今回、光崎さんを連れてこられなかったらクビにされるところだったんです。」

総「え……………」

なんか良かった…

主任さんとはまあ魔術回路やら雑談やらを話していた。どうやらもう体が言うことを聞かないんだとか。大変なこった。それと、なんか疲れた…空間移動魔法で三人とも連れてきたが、月ちゃんには流石にシヨツクが大きすぎるだろう。

ガチャ

総「ただいま…」

月「あ、おかえ「待った」rえ？」

亜空間に移動させる。

総「ミラーロケーション」

空間が割れたような、折り紙をくしゃくしゃにしたような感じになり、現実世界には影響が出ず、感知も不能。

総「一回そこにいてくれ。薬は、こっちで取りに行く。」

あまり心配させたくもないが…やはり話さなきやダメだよな…そ

う考えながらミラーロケーションから出る。

総「おう。」

月「あ、あの、皆は…」

総「ああ、研究所にいたのはご家族で間違いない。前に月ちゃんに聞いた特徴とほぼ一致してた。」

月「ほぼ…?」

総「ああ、何しろ、錯乱状態が強すぎる。さすがにあの状態でここに居らすわけにいなかったから、別空間に居てもらうことにした。それに、月ちゃんには衝撃が強すぎる可能性があったからな。」

月「…元に…戻りますか…?」

総「ふつ。どうやらなかなか信用されてないらしいな。まあ、会って2、3日だからそうもなるわな。」

そりやこの期間内で信頼しろとかその方が難しいわな。

総「戻る、戻らないじゃなくて、戻すんだよ。やろうと思えば人間何でもできる。絶対戻してやるよ。」

ああ、絶対な。フラグじゃねえぞ。

月「よろしく…お願いします…!」

総「任しとけ!」

その治療が始まって4日位たったとき、月ちゃんの仕事も始まった。

月「あの…どんな話をすれば…」

総「どんな話、か。どんなのでも良い。日常生活のこととか、最近こんなことが嬉しかった、とか。とりあえず何でも良い。返事が返ってこなくても話しかけてやってくれ。」

そういつて入り口に連れていく。あ、入り口の場所はまた変えた。

総「…なにやってんだ?」

何か出たり入ったりしてる。どうした。

月「いや、入れないんですけど…ここ通り抜けても同じだし…」

総「ああ、説明してなかったな。この中、この世界と全く同じだから景色は同じだ。違いと言えば、その中に生き物が居ないってことぐらいだな。」

説明するの忘れてたな。…なんかごめ。

……さて、と……解毒剤を飲ませてはいるが……あまり良い効果が出ているとも言えない状況だ。やっぱり頑張ってもらおうとするか……頑張れよ。

三日後

今日もだ。これで三日。ちよつと様子も見に行ってみるか。何か反応を見せているかもしれない。

月「……ね、……その……さんが……え……」

言葉が切れた。見ると、少しではあるが、父親が涙を流している。

総「ふう……やつとか。」

やはり、月ちゃんのおかげだな。俺だけじゃ絶対無理だった。それに、こんなになつた家族の前でも逃げ出さなかった。強い……

月「やつと……?」

ああ、そうか。一人ですつと考えてばっかだったからな。

総「感情が戻ってきてる。おそらくあと3、4日もすれば元に戻るだろう。」

月「ほんと!?!」

総「ああ。」

ただ、このまま回復すれば、だ。否定するわけじゃないが、何かが起こりそうな予感がする。

## 月の家族とのバトル!の後はハンターの集団!?

昨日総さんが2、3日でもとに戻るって言ってたけど奇跡的に戻ってる、とかないかな…って思いながら皆のところへ行く。そつと覗くとお父さんが起きてた。

月「おはよう。」  
すると、

月の父親「……………月…?」

反応があつた。しかも私の名前も覚えてるし、ちゃんと言葉も発せてる。…奇跡……………

月の父親「月…なのか?」

月「うん…私だよ。お父さん…。」

涙が出てくる。声も震えていた。

月の母親「つ、月…」

いつの間に起きていたのか、お母さんも話しかけてきた。

月「お母さん…:会いたかったよ…」

月の父親「月も…捕まったのか…:」

月「あ、ううん。違うの。実は…」

総「あれ、起きてる?…って、会話できてるってことは…」

総さんが入ってきた。

月の父親「!!…………人間…!」

月の母親「月、風貴をつれて下がってなさい。」

あ、何か嫌な予感がする。

月「ちよ、違うの!その人は…」

月の父親「妖剣・狐火!よし、いくぞ!」

話聞いて〜!

総「うお!?!なんだ!?!」

月の母親「それ!」

ドドドドオン

総「ちつ…なんだあ?いきなり斬りかかってくるし、エネルギー弾打っ放すし…おわ!?!結界!」

ドオン：

月の父親「ち…しぶとい…絶対に子供たちには手を出させんぞ！」

総「はあ？どういう…」

月の父親「はあ！」

総「まず…ちっ創成！」

ガキイン

どこからともなく刀が出てきた…もうなんでもできるのかな？

月の父親「はあああああ！」

ガキキキキキキイン

月の母親「はっ！」

総「やべっ！」

ドオン：

…結構当たってた…大丈夫かな。

月の父親「はあ…どうだ…」

総「くっそ…いってえ…」

左肩に直撃したみたい。頑張つて…

月の父親「これでどうだ！」

まずい！今は総さんも自由に動けない。どうしよう…どうしよう

…！

総「動くな。」

え？お父さんが空中で止まってる。…え？

月の父親「な…」

月の母親「か、体が…動かない…」

総「はあ…危なかった…ヒール。」

月の父親「頼む…俺はどうなつても構わん…だから子供たちだけは

…」

総「あのな、人の話もちやんと聞け。別に俺は殺そうとしてるわけでもないし、捕まえようとしてるわけでもねえ。」

月「あのねお父さん、お母さん、実は…」

…一人の魔法使いと狐の少女説明中…

焰終「そうか、それは…申し訳ないことをした。こんなときでなん

だが、俺は月と風己（ふうき）の父親で狐族の長の焰柎（えんしゅう）だ。」

光幽「ご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした。私は焰柎の妻の光幽（こうゆう）です。」

風己「……………風己です……………」

総さんがピクツと動く。びっくりしたんだと思うな。風己は生まれつき声が出せないから脳内に直接話しかけるんだよね……………そりやびっくりするよ。

総「えーと……………ここで一応薬屋兼魔法使いをやってる光崎 総だ。……………とりあえずこれ。」

ん？…なんだろう。いや、薬なんだろうけど、何で今……………

総「まだ完全に薬の効果が消えたわけじゃないからな。さつきもお二人、ほとんど力が入らなかったはずだ。多分それ飲んだら大丈夫だと思う。」

そりや飲みにくいよね……………

焰柎「うーん……………ずっと悩んでもしょうがないか。ゴク」

ん？お父さんの体が少し光り出した。

焰柎「!?なんだ!？」

総「あ、言うの忘れてたが、それ魔力使ってて、副作用で一時間位体が淡く光るんだ。まあそのうち消えるから大丈夫だ。」

お母さんと風己もいつの間にか飲んでいたようで、二人もまた、少し光っていた。

焰柎「度々の手助け、感謝する。」

総「いや、別に俺が勝手にやってるだけなんで。それより、もうすぐこの空間消えるから一回出てくれ。」

空間が消える……………?

風己「……………?」

総「ああ、……………、現実世界に似せた準空間とか亜空間とか、みたいなどころなんだ。俺の魔力で生成したところだから、もう形を維持できなくなる。」

……………、総さんの魔力で作ってたんだ。

光幽「なるほど。なら、早めに出た方が全員の身のため、といったところね。」

総「そ。だから。出入り口はここだから。まあ準備は要らねえと思うが、まあ勝手に出てくれ。」

パキパキパキパキ

焰柎「ふう：何か久しぶりに自分の意思で外に出た気がするな。」

光幽「ええ、そうね…」

ビー！ビー！ビー！ビー！

月「な、何!？」

急にサイレンみたいなのが鳴り出した。

総「まずい！月、全員連れて奥の部屋へ！」

月「え…?」

総「早く！」

ビクッ

初めて総さんに叫ばれた。でも、私は私にできることを…

月「お父さん、お母さん、風己、こつち！」

タタタタタ：

何がどうなってるか分からないけど、とりあえず一番奥の部屋に来た。

焰柎「おい、大丈夫なのか？あの総っていう人は。」

月「…：…：分からない。でも、私は大丈夫だって思ってる。」

風己『あのさ：外から思考が流れてきたんだけど、さっきのサイレンみたいなの、亜人とかを探し出すやつだったみたい。』

光幽「…：大丈夫かしら：私たちを探してるってことは相当な力の持ち主のはず。」

焰柎「…：俺、行ってくるわ。」

月「ちよつと！お父さん！」

焰柎「いくらあの人間が強くても相手は何十人という。命の恩人を見すみす死なせるようなことは出来ない。行ってくる。お前たちはここで待機してくれ。」



様子を見に行ったら、けっこう普通に会話出来た。

総「あれ、起きてる？って、会話できてるってことは…」

月の父親「!!……人間……!」

あ、嫌な予感…

月の母親「月、風貴をつれて下がってなさい。」

これは…バトルか。

月「ちよ、違うの!その人は…」

月の父親「妖剣・狐火!よし、いくぞ!」

妖剣か…当たったら命が刈られるんだっけ?ヤバイな。

総「うお!?!なんだ!?!」

はつや…上手く反応できなかった。

月の母親「それ!」

母親は支援型か。二対一は流石に分が悪いし、相手は半人の中でも、強い方の狐族だ。

総「ちつ…なんだあ?いきなり斬りかかってくるし、エネルギー弾打っ放すし…おわ!?!結界!」

ドオン…

あぶねえ。いきなり斬りかかってくんな。

月の父親「ち…しぶとい…絶対に子供たちには手を出させんぞ!」

総「はあ?…どういう…」

ちよつと、考える時間もくれー!

月の父親「はあ!」

総「まず…ちつ創成!」

ガキイン

とりあえずこつちも刀で対抗だ。

月の父親「はあああああ!」

ガキキキキキキイン

月の母親「はっ!」

総「やべっ!」

ドオン…

まずい…左肩に直撃した…剣が当たらなかつただけラツキーか？

月の父親「はあ…どうだ…」

総「くっそ…いつてえ…」

月の父親「これでどうだ！」

くそ…あんまりこっちから手は出したくないんだが、しょうがない。

総「動くな。」

言霊だ。抵抗力が高いと打ち消されることもあるが、こっちのレベルもかなり高いからそうかからないことはない。

月の父親「な…」

月の母親「か、体が…動かない…」

どうやら聞いたようだ…

総「はあ…危なかつた…ヒール。」

とりあえず話を…

月の父親「頼む…俺はどうなつても構わん…だから子供たちだけは…」

だから人の話を聞け。

総「あのな、人の話もちゃんと聞け。別に俺は殺そうとしてるわけでもないし、捕まえようとしてるわけでもねえ。」

月「あのねお父さん、お母さん、実は…」

一人の魔法使いと狐の少女説明中

焰柊「そうか、それは…申し訳ないことをした。こんなときでなんだが、俺は月と風己（ふうき）の父親で狐族の長の焰柊（えんしゅう）だ。」

光幽「ご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした。私は焰柊の妻の光幽（こうゆう）です。」

風己「…風己です…」

…焦った。あー…直接脳内に話しかけるのか。しゃべれないか、何か他に異常があるかだな。

総「えーと…ここで一応薬屋兼魔法使いをやってる光崎 総だ。…とりあえずこれ。」

ん？怪訝そうな顔された。あ、そうか。

総「まだ完全に薬の効果が消えたわけじゃないからな。さつきもお二人、ほとんど力が入らなかつたはずだ。多分それ飲んだら大丈夫だと思う。」

そりや飲みにくいよな…俺が騙してる可能性だつて向こうからすればあるわけだし。

焰柊「うーん…ずっと悩んでもしょうがないか。ゴク」

ん？あ、体が少し光るの言うの忘れてた。

焰柊「!?なんだ!？」

総「あ、言うの忘れてたが、それ魔力使つて、副作用で一時間位体が淡く光るんだ。まあそのうち消えるから大丈夫だ。」

焰柊「度々の手助け、感謝する。」

堅苦しいな…

総「いや、別に俺が勝手にやってるだけなんで。それより、もうすぐこの空間消えるから一回出てくれ。」

風己『……?』

総「ああ、ここ、現実世界に似せた準空間というか亜空間というか、みたいなどころなんだ。俺の魔力で生成したところだから、もう形を維持できなくなる。」

さつき戦つた影響もあつて魔力がな…

光幽「なるほど。なら、早めに出た方が全員の身のため、といったところね。」

総「そ。だから。出入り口はここだから。まあ準備は要らねえと思うが、まあ勝手に出てくれ。」

パキパキパキパキ

焰柊「ふう…何か久しぶりに自分の意思で外に出た気がするな。」

光幽「ええ、そうね…」

ビー！ビー！ビー！ビー！

月「な、何!？」

何だ？サイレンみたいなのが鳴り出した。まさか…

総「まずい！月、全員連れて奥の部屋へ！」

月「え…?」

総「早く!」

ビクッ

急だったから叫んじまった。

月「お父さん、お母さん、風已、こつち!」

タタタタタ:

よし…とりあえず避難は出来た。来るなら来い!

……ダゴオン!

総「……は?」

扉が膨らんだ。

ダゴオン!ガアン!ゴオン!

おい。

おいおいおいおい。

ドアがぶっ壊れるわ!

ガチャ

総「あの!なんなんすか!」

とりあえず普通の家の人を演じる。

こいつらは…ハンターだな。全員がざわざわしてら。まあ、そりや  
そうだ。亜人反応がある家から普通の人間が出てきたんだからな。

ハンター1「失礼、少し検査をさせていただきます。」

何かよく分からない機械をかざされる。

ハンター2「反応、出ません。」

ハンター1「そうか、申し訳なかった。では。」

総「おい、待ちやがれ。」

ハンターがどうか以前の問題だ。

総「ドア、どうしてくれんだよ。」

その鉄の塊でドアをぶん殴ってたんだろ。弁償してくれるよな?

ハンター(リーダー格)「残念ながら我々は任務のために先を急がな  
ければいけないのだ。では、」

おい、待てよ。なんだと?

肩をつかむ

ハンター（リーダー格）「ん？何だガン！ガアッ！」  
肩掴んで顔を殴ってやった。

ハンター1「な！リーダー！」

ハンター2「構え！」

うーん、部屋を荒らされるのは嫌だな…一回広いところでだな。

そう思って、飛んで外に出る。周りは森だ。

ハンター達「なっ！」

「飛んだぞ！」

ハンター1「あいつは魔法使いだ！気をつけろ！よーい…発射！」

ババババババババババババ：

機関銃なんかで打ち落とせると思うなよ…ここは森の中だ。木々も邪魔でそう攻撃は入らない。それにここらへんは俺が一番よく知ってるからな。負けるわけがねえじゃねえか！